図書版

島木健作全集

第八巻

島木健作全集

第八巻

国書刊行会版

島木健作全集　第八巻

昭和51年10月20日　印刷
昭和51年10月25日　発行

定価3800円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著　者　島木健作
著作権者　朝倉　京
発行者　佐藤今朝夫
制作・尾沼　汎

〒170 東京都豊島区巣鴨3—5—18
発行所 株式会社 国書刊行会
電話 (917)8287(代表) 振替・東京—5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

第八巻　目次

嵐のなか……三
北方の魂……二〇九
土　地……二二三
解　題……四二一

監修

稲垣達郎

小林秀雄

中村光夫

編集

大久保典夫

小笠原克

高橋春雄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

嵐のなか

一

樽前岳は今日はよく晴れた空に靜かに煙を吐いてゐる。蔭山雄吉が豐平川の堤防に下り立つたとき、あたりはまだほの暗かつた。川面を渡つてくる風は、清涼な初秋の氣をいくらか寢足りぬおもひの顏に吹きつけて來た。雄吉は汀へ下りて行つて、流れる水を手にすくつて顏を洗つた。それからまた歩きだした。長い堤防をつたつて行きながら、彼の眼は南の空の一角に注がれてゐた。ひと度白みかけた空は見る見る明るく晴れ渡つて、樽前の姿を浮き出しにし、その上に細くたなびいてゐる雲と見紛ふものも次第に火を噴く煙の形をとつて來た。

「ああ。」

雄吉は子供のやうに喜びのこゑをあげた。休暇で歸つてゐるひと月の間、彼は幾度かこの川のほとりに杖をひいたが、曇つてゐたり日暮れ方だつたりして、一度も樽前の姿は望み見ることができなかつた。あの山をすぐ眼の前に仰いで支笏湖がある。子供のころ、湖に船をうかべたときのことが思ひうかんだ。

水門が見えるあたりへ來ると、雄吉の足は急ぎだした。丁度その所で折れ曲る堤の一角に腰を下して待つてゐる片桐正春の姿を見たからである。雄吉は遠くからこゑをかけて、肩にした釣竿を高く振つて見せた。腰の魚籃のなかの餌箱と空罐とがふれ合つてカタカタと鳴つた。

「待つたかい？　だいぶ。」

片桐は長身のからだを眞直に起して、立つて迎へた。いかにも山野を跋渉するに慣れたものらしく、甲斐々々しい身なりが板についてゐる。
「いや、ちよつと前に來たんだ。」
二人はならんで腰をおろした。
「すぐ出かける？」
「まア、少し休もう。——君、飯は？」
「食つて來たよ。」
「僕はたつた今こゝですましたんだ。寢坊したと思つてあわてたんだね。——もつとも、大抵さうなるだらうと思つてゆうべのうちに用意しておいたんだが。」
片桐は笑つて、膝まはりのサンドウイツチの殼をひろひ、なかの林檎の皮もろともバリバリとねじつて、足下の流れ目がけてほうり込んだ。殼は水のなかで二度三度くるくると舞つてから、矢のやうに速く、水門の下に呑まれて行つた。
「ああ、今日は樽前がよく見える。」
片桐もそれを言つて、はるかな南の空を仰ぐやうにした。
「さて、今日はどう行かうかな？」と、彼はかくしから地圖を出して膝の上にひろげた。雄吉はのぞきこんだ。片桐は指さきで道をたどりながら、
「ここをかう行つて、この川を上へのぼつて見ようか。」
「簾舞のあたりから入るんだね？」

「少し遠いかな。」
「山女（ヤマベ）だったらしかし、そのへんまでのぼらなかったらだめだらう。――行ったことある？」
「ああ、三四年前に一度ね。その時はかなりの成績だったんだが。もっとも季節がもう少し先だったから。」
「僕は中學校の頃、眞駒内川をのぼったことがあるきりだが――。山女は一向にだめだった。」
「もうずゐぶん荒されてゐるからな、どこもかしこも、――まアゆっくり道草しながら行かう。歸りは定山溪へ行って、泊って歸らうぢやないか。」
「うん。それもいいな。」
「眞駒内まで歩いて、あそこから乘るか。」
中のだぶついてゐるリュクサックを肩にかけて二人は立ち上った。雄吉は、片桐のみちびいてゆくところへ、どこへでも安心してついてゆくつもりでゐる。水門の所で待ち合したといふのも、片桐の家が、そこの堤を下りて間もなくの所であったのにもよるが、どこへ行くかについて、大體の方角しか、豫めきめてなかったからでもあった。夏の休暇が明けて、もうぢき東京へ歸る日が近づいたので、雄吉は片桐をたづねた。その時、どっちから言ひ出すともなしに、雄吉が歸る前に、二人で一緒に釣りにでも行かうといふことになったのだった。昔、少年時代、彼等はよく一緒に、今彼等が流れに沿うてあるいてゐる川の上流や下流で眞黒になって泳いだり、その淵や瀬で釣ったり、西の方に連る山々を攀ぢて、山葡萄やコクワの汁に舌を青く荒したものだった。やがて雄吉は東京の中學に轉じ、その後の學校生活をずっと内地で送るやうになって、二人は離れ離れに住まねばならなかったが、休みには歸鄕して、友情に變りはなかった。そして二人のどっちにとっても、今年の夏は學生として送る最後の夏なのである。釣りにでも行かうといふところへ無雜作に

話が落ちて行つたといふのも、最後の夏を思ひ出深く送らうとの友情からだと雄吉は感じてゐた。何不自由のない家の子だからといつて、來年の夏はそれぞれに社會の異なるなかにゐる。……彼等は二人ともに、祖父の代に北海道に移住して來て、產を成したものの家の子である。蔭山家の名も片桐家の名も、この地方にゐて知らぬものは少い。金融業者として成功した蔭山家は、廣大な土地と漁場を持ち、多くの會社に關係してゐる。未開の地の道路の開發や、鐵道工事や、彼等の町の大きな建築には片桐組の手に成つたものが多く、この家も亦地方に廣大な農業地を所有してゐる。

道を少し行くと假橋があつた。砂利をでも馬車で運ぶためにかけたものであらうか。二人はその橋を對岸へ渡つた。先きに立つた片桐は、雄吉より二寸は高い。紀州の出である親の血を受けた彼は、その國の人に特徵的な秀でた鼻と、切れの長い眼を持ち、南國的なはつきりした顏立ちである。情熱的といふよりはおだやかな聰明さに輝いてゐる。その陰のない明るさにくらべて、雄吉は對照的であつた。羽後の國人のあとである彼は、やはり父祖の鄕土を思はせる顏立ちだが、いい家の子らしい苦勞のなさのかげから、北國人らしい憂愁と內氣な表情がちらちらと覗くことがある。學生生活の最後の夏とはいつても、彼はまだ早生れの二十二で、年齡的な若さだけでなく、近頃の學生は、高等學校の生徒は昔の中學生のやうで、大學生は昔の高校生のやうだといはれるものを、その外貌のどこかに持つてゐた。頭腦のなかはともかく、外貌の示すものでは、わづか一つちがひの片桐がずつとのおとなであつた。無用なことに心を勞したり道草を食つたりすることなく、物事はなんでもきちんきちんと處理し、それはたくまぬ打算にも適ふであらうと思はせるものは、性格からといふほかに、雄吉の經濟科に對する片桐の工科といふことからも來てゐるのかと考へさせられる……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こつち側へ渡つて、河原の石を踏んでしばらく行つたとき、片桐はふとふり返つて言つた。

「このあたりにたしか葡萄園があつたね。林檎畑もある筈だ。ちよつと寄つてみようぢやないか。」

堤を下りた向ふにその畑はあつた。林檎の枝は低く、横に廣く張つて、大粒の實は袋をのぞかれ、秋の日に向つて色づけの最中だつた。その木の下に鷄舍があり、鷄が遊んでゐるのは、鷄糞が自然のうちに林檎の木の養ひになるやうにといふのであらう、雄吉はかつて何かで讀んだ記憶がある。二人は畑のなかの道を、農家の方へと行つた。そこの豚小舍で、豚に餌をやつてゐる農夫に、林檎をわけてくれないかと賴んだ。

「さうさね、今ちやうど時期のわるい時だもんだから……。」

早稻にはおそく奥手には少し早いといふ時なのであつた。中手は餘りいい味ではないと斷りながら、澤山はないその木のなかからとくによく色づいた大きな實を六つ七つもぎとつてくれた。葡萄の棚のある方へも連れて行つてもらつたが、これもいくらか早目だつた。しかし琥珀いろに半透明な粒々が朝の露にぬれてゐる色艶と、大きな房が手のひらにずつしりと重い感觸とで二人は十分に堪能した。

二人は林檎を嚙り嚙り、さつきの道をあるいて行つた。林檎はあるきながらズボンの股のあたりにいく度かこすりつけると、カツと燃えるやうなくれなゐに光り輝いてくる、それに大口でかぶりつくのだつた。酸味の强すぎる汁が口一ぱいに泡立つやうな爽かさだつた。よく熟してはゐるけれど、もぎたての實の味はなまなましすぎるのだ。

「これはたしか、旭つていふんだね。」

酸味に弱い雄吉の齒は、一つをたべ終へる頃には浮き上つて來てゐた。

道は眞駒内の牧場に通ずる廣い通りへ出た。牧草畑の草はすでに刈り取られてしまつてゐた。遊んでゐる

一頭の家畜もなかつた。廣い草原のなかに、こんもりと繁り、大きな影をおとして靜もり深く立つ楡の大木には夏の名殘りの寂しさがあつた。

「もう、東京へ立つ日、きめた？」と、片桐がふりかへつて言つた。

「今のところ、十五日ときめてゐるんだけど。」

「朝雄さん、今年はたうとう歸らなかつたね。」

「うん、あいつは鎌倉の叔父の家だ。あつちこつち遊びあるいてゐるんだらう。」

朝雄は、雄吉の三つちがひの弟である。

「朝雄さんは何科へ行くの？　もうきまつたの？」

「さあ、……どつかへ行くつもりかね。」

肉親のこととなると、口數も少く、冷淡な素ぶりになることのなかに、却つて深い愛情を感じさせることもある。雄吉の場合はしかしちがつてゐた。たつた二人の兄弟でゐながら、何事についても、ことに人間のまじめな問題についてしみじみと語り合つた記憶のない自分たちを、雄吉は寂しく思つた。それは互ひに相手のことを深く思ひつめながら、思ひつめてゐる故にこそ、却つて容易には言ひ出さぬといふ、肉親の間に特有なあの感情からではなかつた。また單にてれるといふことでもなかつた。愛さねばならぬものを愛し得ぬ惱みとでも言ふべきものかも知れぬ。二人の間をへだてる眼に見えぬものは一體何であらう？　記憶をたどつて見れば、ずつと早い少年時代からはこの惱みを持ちつづけて來た。弟に對する感情は彼の心を深め、父、母、祖父、叔父、叔母など、周圍の人間に對するそれぞれの感情を一々こまかく味ふことにまで彼をみちびいて行つた。それは惱みであると同時に愉悅でもあつた。たつた今そのわきを通つて來た川の土手の上、

今通つてゐる道の左にひろがつてゐるこの草原の上に寝ころんで、少年の彼は多くの物思ひにふけつた。自分の人生への開眼は、肉親に對する感情のなかにはじまつたやうな氣がする。……それにつけても、男女合して十人にも近い兄弟で、いつ訪ねて見ても歡聲が湧くやうな片桐の家のことが思はれる。

種畜場の中へはいつて行つた。片桐は、

「馬でも見て行かうよ。」と言ひながら、馬小屋の方へ急いだ。

そこには種牡馬がつながれてゐて、若い牧夫が、丁度一頭のサラブレッドを引き出して手入れしてゐるところであつた。牧夫は、こんないい馬は、新陳代謝がはげしく老廢物のたまることが多いから、手入れの日數も多くなる、などと話しながら、鐵櫛でしきりに垢を掻き取つてやつてゐた。艶々した栗毛の毛をわけて、カリツカリツといふやうな音をさせて鐵櫛が馬の肌を掻くと、白いふけのやうな垢が掻き起される。見てゐて氣持がいいほどあつた。まだ三歳のサラブレッドの、細くひきしまつた筋肉が時々ぶるるるるとふるへて、それはありあまつた活力の、内からの動きのやうであつた。細く花車な足首には、その毛の末端にまでも神經の行き屆いた勁さがあつた。

「まるで、人間みたやうな眼をしてゐる。」

さう思つて、雄吉はぢつと見てゐた。音がして、もう一人の牧夫がそのすぐとなりの仕切りの中から、ほかの一頭を引き出すところであつた。それは重輓馬のペルシュロンだつた。引き出されて向うへ、ゆつくりとした重みのある歩を運ぶ美しい青毛の、隆々と盛り上つた、筋肉の動きは、逞しい情欲といつたものを感じさせた。

二人はそれから豚舍の方を見て廻つた。運動場の秋の日ざしのなかに心地よげに寝てゐる偉大なヨークシ

アの、銀光りのする毛とその間から透けて見える薔薇いろの皮膚とは、この環境のなかでは、食ひ足りたものの不潔さもべつに感じさせなかつた。少しばかり薄氣味のわるい思ひをしながら、雄吉は垣の間から手をのべてその肉塊にさはつて見たりした。白色の毛はしゆろの毛のやうな手ざはりだつた。牛舍では、今までにもう何度か牧夫を傷つけたことがあるといふ巨大な牡牛が、うす暗がりのなかに血走つた眼を光らせてゐた。若い牧夫は無造作にその仕切りのなかに入つて行つて、古い敷藁を一方に片寄せ、新しい敷藁を敷いてやつてゐた。

「なにを！　このどすめが。」

古い敷藁をがつしりと踏んで容易に動かうとせず、却つて反抗の眼を光らせる牛を、牧夫は荒々しい言葉で罵つて、熊手の柄の強い一撃を加へたりした。見てゐる方がハラハラした。

「あれ、あんな風に頭を下げて、足で前を掻くでせう。牛はああいふ時が危險なんです。」

外へ出て來た牧夫は、腕で額の汗をはじきながら、そんな風に說明した。

牝牛どものなかには、今がその季節と見えて、產み月にかかつてゐるものが多かつた。大きな腹をして、物憂ささうに、厚くしてもらつた敷藁の上に足を折つてゐる。人を見る眼も何かものを訴へたげである。仕切りの入り口には豫定日をしるした木札がかかつてゐる。

うす暗がりから外へ出た眼に光はまぶしかつた。日はもう暑いくらゐであつた。歩きつづけて來て、二人とも汗ばむ肌を感じてゐた。

「さうさう、あそこに知つた男がゐるんだ。」

片桐はあるきながら、少し離れた建物の方へ眼をやつた。

「ちよつと一休みして行かう。――ゐればいいがな？　いや、多分ゐるだらう。」

その小ぎれいな建物は、搾つた牛乳を殺菌し冷却するところだつた。「今日は」と聲をかけて入つて行つた片桐は、そこにゐて振り返つた若い男ににこにこと笑ひかけた。朴訥さうな青年は、「若旦那」と片桐を呼んで挨拶した。

「御馳走をしてくれないかな、ひとつ。」

口數の少い若ものは、好意の一ぱいにあふれた赤い顏をして頭をちよつと下げてうなづいて見せた。

牛乳は、魔法瓶のやうな形をした、透明なガラスの器に一杯に滿たして持つて來られた。ガラスはやや青みを帶びてゐた。その色を映して乳自身もいくらか青みを帶びて見えた。そしてそれは一層新鮮な感じを增した。大きなコップに注いで飲む乳はいい香りで、その冷たさは氣持よく腹にしみた。

禮を言つて立ち去る時、片桐はいつの間に用意しておいたものか、銀貨を紙にひねたのを出して、「子供さんにでも何か」と言つて盆の上においた。五つぐらゐの可愛い女の子が一人、若ものの腰のあたりにまつはりついてゐて、乳をのむ間も、片桐は常談を言つてその子をあやしてゐたのだつた。若い父は幸福さうな顏をして二人のざれ言を聞いてゐた。盆の上のものを取るまい、取らせようとすることでは、二人の間にちよつと押問答があつた。相手が朴訥な人柄で、一應の儀禮からだけ辭退してゐるのでないだけに、慣れぬものには當惑するやうな應對と見えたが、雄吉は先に出て出口の所へ立つて、物慣れた片桐の態度を見てゐた。

「あいつには、女のきようだいがあるんだ。」

なんといふことなしに、何の連絡もなしにふと雄吉はそんなことを思つた。自分と片桐との違ひのなかには、片桐には女のきようだいがあり、自分にはないといふことに原因してゐるものがあると思つた。今見た

片桐がすぐにさうだといふのではなかつたが、自分の妙な子供つぽさ、はにかみ、いつまでたつてもおとなにはなれぬ氣持でゐるところには、右の原因があるやうに思つた。彼は片桐を羨むこと、片桐のやうになりたいと思ふことはほとんどなかつた。しかし、女のきようだいを持たぬことを不幸と考へることは、此頃、折にふれて多いのである。いい姉か妹があつたならば、自分の心はもつと明るく素直に、いぢけずに、のびのびとしたであらうにと思ふ。さうして彼がそんな風に思ふ時、彼は心の底の方に、片桐の妹の梢の姿を見、聲を聞いてゐる。あるひは、梢を思ふことからさきの思ひがみちびかれる。

「彼の親父さんがね、古くから僕の家に出入りしてゐるんです。」

肩をならべてあるき出したとき、片桐はさう言つて說明した。

牛の群れが、運動のためにどやどやとかこひの中へ出て來た。刳船のやうな長い形をした水槽のなかにてんで首を突つ込んで水を飲みはじめた。水槽のふちに羽を休めてゐた赤とんぼがパツと飛び立つて、牛の背なかにとまるものもあつた。日にむれたあたたかさうな推肥のにほひが、あたりに流れてゐた。

間もなく片桐と雄吉とは、眞駒內の驛から電車に乘り、簾舞で下りた。

「君、どうかな、靴は？　今日は具合がわるくはないかああ。」

改札口を出るとき、片桐が言つた。

「ああ、さうか。」と、雄吉は歩きながら自分の足もとを見て、今はじめて氣づいたやうに笑つた。

「水のなかに入らなけりやならないんだものな。水にひたつちや、この登山靴は重いや。」

「どこかそのへんで地下足袋を買はう。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com